

核酸分子を発見

県立大ががん治療薬へ期待

ビタミンD濃度低下防止

県立大などの研究グループは3日、人間の体内にある活性型ビタミンDの濃度を低下させる「ビタミンD不活性化酵素」の働きを妨げる核酸分子を発見したと発表した。今後、がんや骨粗しょう症の治療薬の開発につなげたい考えだ。同大の安田佳織講師(43)によると、この不活性化酵素の働きを阻害する核酸分子の発見は、世界で初めてとみられる。(中野雄大)

薬都 ブライド

食事や日光浴によって作られるビタミンDは、体内で活性型ビタミンDに変化し、骨の形成や細胞の増殖・分化を促す。

一方、ビタミンD不活性化酵素は、活性型ビタミンDの濃度を低くする。元々体内に存在し、活性型ビタミンDの量が過剰になるのを防いでいる。ただ、不活性化酵素が過度に働けば骨や細胞に悪影響を与え、骨

粗しょう症やがんを引き起こす原因となり得る。

不活性化酵素の過剰な働きを抑えようと、県立大と金沢大、北陸先端科学技術大学院大学発のベンチャー企業「バイオシーズ」(石川県能美市)のグループが約2年前に研究を始めた。

安田講師らは、100京種類の核酸分子の中から、不活性化酵素に作用するものを探す実験を重ねた。活性型ビタミンDを生み出す酵素などには影響を与えず、不活性化酵素を選んで

作用する核酸分子「Aptamer」を見つけた。

安田講師によると、不活性化酵素の働きを妨げる物質は複数見つかった。ところが、核酸分子の発見は初めてという。これまで、医薬品になったことはないとい

い「これからはAptamerに改良を重ねる研究を続け、治療薬の開発を目指したい」と話している。

米国化学会の学術雑誌は4月、安田講師らの研究成果をオンラインで公開した。